

訳者解説

本書はオリガ・ミハイロヴナ・フレイデンベルグの『テーマとジャンルの詩学』(О.М.Фрейденберг. *Поэтика сюжета и жанра. М., Лабиринт, 1997*)の全訳である。

フレイデンベルグは、一九二〇年代から優れた文芸学者として活躍したものの、当時のソヴィエト連邦の苛烈な政治的、思想的状況下で、学問的には長きにわたり日の当たらぬときを過ごした。彼女は、主に、ジャンルの構造、テーマ、神話と文学の関係、律動的表現と詩的言語の起源、芸術の本質およびその進化にまつわる法則等を分析対象とし、とりわけ意義が認められるのは、原始的文化における共時的機能の研究である。ユーリー・ロトマンが指摘するとおり、この時代に特に先進的であったのがフレイデンベルグの研究で、それは、同時期にエイヘンバウムやトウイニヤーノフらが同様の文化の機能を考究し、プロップがイニシエーションを呪術的昔話が創られる働きとして捉えようとした試行と通底するものである。フレイデンベルグの著作にはこうした先駆性が見られる他、主人公に対する喜劇化、戯画化された分身や、

神聖な儀礼とそのパロディの関係への関心も露わであるために、バフチンの手掛けた仕事との類縁性もすでに言及されているのは周知のとおりである。

本書は、一九九七年に、N・プラギンスカヤの編集により、本文の校訂、文献リストの訂正、補足などがおこなわれた版がロシアで出版されたが、英訳も刊行されではおらず、著者の晩年の主著である『形象と概念』に繋がる重要な著作であるものの、いまだ十分な注意が払われているとは言いがたい。加えて、扱われる時代や対象が実に多岐にわたるため、瞠目すべき豊かな学術的知識と優れた学者としての洞察力の賜物たる著作にも関わらず、その概要を分かりやすい形にまとめて提示することがきわめて難しい。そのため、この解説では、フレイデンベルグが「テーマとジャンル」に強い関心を抱いていたことを、まずは著者の日記と著作から抽出し、さらには、本書執筆に際しての主要な論点である「テーマとジャンル」を分析する素材として、著者が原始社会における思考や意識を足掛かりとした点を確認したい。その後、著者の引く具体例を示しつつ、原始的意識におけるイメージの多様性および同一性と差異について触れる。最後に、原始社会の意識における同一性と反復にも焦点を当て、フレイデンベルグが分析するトーテミズム的世界観を概観し、本書の概要を示したいと思う。一九二〇年代から三〇年代にかけて、言語学者マールの周辺で研究を続けた卓抜した学者であり、ソヴィエト連邦の古典文献学で初めて博士号を授与された女性でもあり、幾多の知識人と交流を持ちながらも孤高の生涯を貫いたフレイデンベルグの来し方を振り返りながら、ここに本書の書かれた背景や意義を跡づけることとしたい。なお、この解説は、二〇二五年三月二十七日に東京大学駒場キャンパスで開催された公開研究会「近代ロシアにおける〈個〉と全体」での訳者の発表を基にしており、科研費研究課題「ロシアの『個』概念の再検討に向けた分野横断的研究」(23K00436)の助成を受けた研究成果となつていることをあわせて申し添えておく。

テーマとジャンルへの関心

フレイデンベルグは、一八九〇年三月十五日、独学の技師で発明家、作家であるユダヤ人モイセイ・フィリッポヴィチ（ミハイル・フョードロヴィチ）・フレイデンベルグと、画家レオニード・オシポヴィチ・パステルナークの妹であるアンナ・オシポヴナ・パステルナークのあいだに生まれた。奇しくも同年に誕生したレオニードの息子であるボリス・レオニードヴィチ・パステルナークとオリガは、およそ四十五年にわたり、書簡による交流を続け、そこからは彼らが共有する知的、情緒的背景や芸術的傾向を看取できるのみならず、それ 자체が、一九〇〇年代初頭から半ばにかけてのロシアの科学と文化の歴史にまつわる貴重な資料となっている。中学生の頃、彼女は、英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語の家庭教師についており、これが、後に長く続く豊かな研究生生活の下地となつた。一九〇八年に中学校を終えた後、大学に入学することはなかつたものの、ロシア初の女子高等教育機関であるペテルブルグのペストゥージエフ女子大学の講義を友人たちと共に聴講していた。また、一九一四年までにヨーロッパの主要な地域を旅して多くの言語を修得したが、第一次世界大戦の勃発により、その機会も断たれることとなる。大戦中は看護師として従軍し、一九一七年、革命を経て女子学生に門戸を開くようになつたペトログラード大学に入学した。一九一九年、ジェベリヨフ教授の指導で西洋古典を学び始めると、翌年、父がこの世を去る。彼女が籍を置いた文学部は、その後、東洋・西洋言語・文学研究所となり、そのスラヴ・セクションを率いていた言語学者マールの下で、一九二四年十一月、『ギリシア小説の起源』で学位を取得した。一九二七年の終わり頃までに書き上げられた『プロクリス』は、事実上、本書の第一稿にあたり、ドイツで暮らしていた伯父のレオニード・パステルナークは、その自費出版のための資金提供を姪

に申し出ていた。この『プロクリス』を執筆していた頃のフレイデンベルグの日記を見ると、ジャンルとテーマこそがまさに執筆の初期段階から本書の主眼に置かれていたことが、明確に見てとれる。

私は、ジャンルおよびジャンル形成の問題に関して、それを形式的な解釈から解き放ち、新しい見方を提起した。ジャンルについて、誰も私のような方法で研究していかなかつたとすれば、テーマに関しては別だつた。マール教授とフランク・カメンツキイのテーマへの関心は、意味論によつて総括的に意義づけられた。しかし、私にとって、意味論は、形態論を定義づける、すなわち、形態の形成を法則化する意義をもつものだつた。私は、文学研究の分野で、自分がはじめて、文学のテーマに、世界観に通じる体系を見いだしたと思いたい。実のところ、問題は認識論に関わるものであつた。私の述作において、テーマは不随意的な性格を帶び、原初の生き生きとした（神話的な）思惟をじかに表出したような特質を有する。テーマは、形態形成の分野、そして具象的な内容の領域でも特有の定律を持つ。テーマは、イメージ形成の法則に形作られ、歴史的に条件づけられた世界認識だからである。

時代が二〇年代末にさしかかると、唯物弁証法を至上とする趨勢となり、彼女の研究生活の前途にも暗雲が立ちこめる。一九二九年、フレイデンベルグはマール率いるレニングラード大学東洋文学言語研究所ヤフェト研究所の一員となつた。一九三二年には、レニングラード哲学・言語・文学・歴史研究所古代言語部門の主任教授となるが、やがて、彼女を推薦した新所長ゴルコフスキイも逮捕、流刑され、大学の穏やかな研究環境は一変し、オリガにも政治的圧力が及びつつあつた。そのような中でも精力的に仕事を進め、一九三六年には、本書が出版されることになる。著者自身、「十年間、私はこの本に携わつてきた。昼となく、夜となく、仕事をしているときだけではなく、休んでいるときでも、祝日でも、休暇のときで

も」と述懐した著作は、出版後すぐに売り切れ、三週間後には当局により差し押さえられた。九月二十八日、『イズベスチヤ』に「有害なる戯言」と題するレイティゼンの悪意に満ちた評論が載せられたのを受け、パステルナークは編集長のブハーリンに手紙を書き送っている。

私は最近、フレイデンベルグの本とレイティゼンの評論についてジー・ボフと話しました。私は著者との著作を存じております。評論は本の内容とほとんど関係がないものです。フレイデンベルグの本は、古代の文学的遺産が創り上げられた時代に先立つ文化的・歴史的基層の研究分析を主旨とするものです。

パステルナークに擁護された本書において、フレイデンベルグは、自らの研究の主題と目的および方法について、きわめて明確に示している。原書の解説でブランキンスカヤが述べるように、本書は、初稿では『テーマとジャンルの意味論』のタイトルが掲げられており、「意味論」への関心は、一九二六年に発表された『ヴエルテープ劇の箱の意味論』から引き継がれるものでもあった。著作の中で、観念論的詩学およびその新たな形であるフォルマリズムを批判した上で、フレイデンベルグは詩学を立て直す必要性を訴える。その際に、詩学にまつわる諸問題を扱うのではなく、これまで手掛けてきたテーマとジャンルの領域に留まると自らの立場を表明した上で、次のように明言する。

この研究において私が感興をそそられる中心的課題は、文学の意味論とその形態論の一致を読み取ることである。私が立証しようとするのは、差異を説明するのに、そこから差異が生じる原始における混合あるいは融合に頼る必要はなく、すなわち、差異は、同一性からの分離でも、あるいは（本質

的には同じものであるが）その発展の所産でもなく、その最も本質的な特質をなす、ということである。つまり、これは形態形成の面で課題となる意味論の問題である。　　（本書二三一—二四頁）

続けてフレイデンベルグは、「新たな社会の観念形態を創造的に編み直すにあたり、同じ世界観の保持する意味が、いかにして内容と構造の異なる位相を有するに至ったのかを、何ゆえに、このような意味が、何よりもまずテーマあるいは文学の萌芽ではなく、ただ、その助けによつて人々が生き、働き、食べ、子を育てるような生の意味、単なる日常の意味であつたのかを示したかった。すなわち、最初の人類社会で作り上げられた、自然と生活にまつわるこの歴史的意味を持つ暗号がいかなるものかを示したかったのである」と述べ、テーマとジャンルを分析するにあたり、原始社会における意識や思考への関心を露わにしている。フレイデンベルグは、本書の第一部で、テーマに関しては、その後、各章で分析を行うと前触れしており、第二部では、テーマ、登場人物、アトリビュートについて検討することを聲明している。ロシア語でおよそ三〇〇頁のこの著作のほとんどにあたる二〇〇頁近くを占める第二部は、食事、結婚、死、勝利といった様々なテーマが見出し語となり、実際に、原始的意識の発露たるそれらが検討に付されている。

原始的意識におけるイメージの「多様性」および「同一性と差異」

フレイデンベルグは、原始共産主義の生産条件（自然経済、公共的ではなはだ原始的な労働）と、そこには源を発する生産関係（質的に低級で、個人としての基盤を区別することなく、類型化された単調な社会的平等）は、はなはだ特殊な思考形式を生みだす土台であるとし、「生産、労働行為、生物学的場面、これらは全て宇宙進化論によつて解釈され、（宇宙進化論の概念自体はまだないとはいえ）活動の中にしか

るべく再現される」として、食事、性交、死という場面の重要性について次のように述べる。

食事、性交、死、これは三つの生物学的場面であるが、現実的な世界観の前提がない以上、それらのうちの一つとして現実としては認識されない。狩猟を行う原始共同体は、自然との絶え間なく激的な戦闘という状況の下に、客観的に存在する。その生産自体は、そうした激戦と結びつき、格闘、白兵戦において、自らの主要な仕事道具によつて、つまりは手と石でもつて、猛獣、その肉、その血を自らのものとする。戦いは、原始狩猟社会の感覚では、世界を知覚するための比類なきカテゴリーであり、その宇宙進化論、戦いを模倣する全ての場面を、唯一意味論的に内包するものである。

（本書七八頁）

「食事は、我々の言葉で言うならば、死と復活であり、生産行為でもある」ことに言及しつつ、フレイデンベルグはそれらを戦いの形式における宇宙（トーテム）の存在と欠如として認識し、そのことから、「食事」、「生産行為」、「復活としての死」のイメージの均衡が生まれ、それらは互いに融合し、互いの状態に移行し合い、それゆえに起源的に等価であると述べる。また、こうした戦いは、トーテムにおいては双対で一つであるペアの存在によつてその意義を説明される。

集団のメンバーは、一人として個々に知覚されることではなく、彼ら各人は消失しては出現するトーテム、すなわち双対で一つのもので、彼らはそれぞれが互いにとつてもう一人の存在である。狩猟時代の終わり近く、共同体と分かれ難く結びついたこのようなペアの一一致、互いの同等性は、しかしながら、いまだ反目を意味していなかつた戦いに際して作り上げられた。このような闘士のペアは、氏

族社会の時代に血縁関係（二人の兄弟、父と息子、兄／弟と姉／妹）によって形成され、とりわけ一対で一つのトーテムから構成され、その一方は天空で、他方は地獄である。これら全ての近親関係にある闘士は本質的に互いに平等の関係に置かれ、獵師である女性でさえ完全に男性の獵師、自らの兄弟と並立し、彼と共に彼女は獣を捕獲して、あるいは戦いで勝利を得る花婿と共に並ぶのである（神话の女狩人アタランテ、狩獵の女神アルテミスおよびそのバリエーションと比較されたい）。宇宙的諸力にまつわる至高の価値は、主として、すなわち太陽（火）、水、そして空気であり、それらをデミウルゴス（造物主）とし、天地開闢を支配するものとしての地獄は、夜、カオス、エレボス（黄泉）の中に隠喩化される。それより後に、こうした全てを人格化するありし日のトーテミズムが出現するのは、広範にわたる反意語的なものにおいてであり、つまり、神となつた彼らは、常に、同時に、地上と地下、敵対者とその犠牲者、両親と子供であることが分かるのである。（本書二五八—二五九頁）

このようなトーテムの例にとどまらず、フレイデンベルグは、卓抜した学術的知識と洞察力を以つて、類縁性のないよう見える二つの物語から不变の類型を抽出し、一見繋がりのない二人の登場人物のあいだに同一性を、二人の相反する人物のあいだに同一のものが別様に現れることを把捉しており、それがレヴィ・ストロースの神話学に先駆けるものであることは自明である。こうした前提のもとに、原始的意識は、「同様で反復するものの中に世界を認識する。だが、イメージは多様な形を帯びて、全き意味論的同一性を保ちながらも、その構造は異なるものである」と言明する。「同一性における差異」は、すでに見たとおり、本書の第一部で彼女が挙げる中心的課題としても明示されている。

本書では、穀物、豆類、水、粥、肉といった食物、それに加えて活動の多様な形態も例に挙げられて、

先に示したような「同一性における差異」の論証が繰り返しなされる。その際、先述の、食事、性交、死という三つの生物学的場面が十分に意識されており、穀類を例にとれば、新郎新婦にそれを浴びせかける行為が豊穣を顕在化させながら、デメテルとペルセポネーの力を体現する物として機能するならば、大地に埋められた穀物の種子は、生命、死、復活、不死のメタファーを提供するものである。また、豆を引き合いに出せば、占いでは、色に拠る豆の分類あるいは分配は人の行く末を表す何らかのメッセージをもたらし、民間伝承および民衆のまじないや呪術においては、炊いた豆は性的能力を呼び起こす食事となり、サトウルナリアでは、豆は太陽と冥府のテーマにまつわるモチーフを象徴し、中世のカーニバルと季節ごとの笑劇では、豆の王は、支配者、そして喜劇的出し物の主役となる。このように、実に豊かな具体例を惜しみなく挙げながら、フレイデンベルグは、「差異は同一性からの分離でも発展の賜物でもない」という自らの主張を展開するのである。

また、このような持論を、本書の第一稿にあたる『プロクリス』を執筆するときから著者が持ち続けていたことは、以下の日記の記述からも確認することができる。

私が主に述べたかったのは、詰まるところ同一であることが示される多様な差異についての見解である。『プロクリス』では、第一に、いくつもの古代における意味論に完全な体系を付与した。意味論の様々な形を取りあげ、それらが一つのものであることを提示したかったのである。私は形成と差異にまつわる法則を定めたいと思つていた。多様なテーマ、神話、儀礼、事物の混沌が、私の述作において一定の意味のまとまりである法則性のある体系となつた。

一九三〇年代に現れた諸研究においては、「形式と内容の一体性」および事物の観念に対する優越が当

然のごとく謳われたが、フレイデンベルグが大胆にも主張したのは、まさに「差異こそが同一性において最も相応しい特性である」という点であった。

原始的意識における「同一性と反復」

さらにフレイデンベルグは、「同一性についても、原始的意識の体系における差異についても、それぞれに等しく論ずるべきではなく、はじめに何らかの融合した特定されない個が存在したと考えるべきではなく、その後の発展段階において、そこには差異が生じ、つまりは、双方が同時に、撞着的に存在した」とし、「イメージは同一性の機能を果たし、すなわち原始的形象性の体系は、平等と反復の形式における世界の知覚体系」であり、「主観と客観の、生物と無生物の世界の、言葉と活動の同一性は、原始社会の意識が同様の反復を用いる原因となつてゐる」と述べた上で、原始社会の意識における同一性と反復に焦点を当てて、次のように明言する。

同一性と反復は、外的 세계와 社会それ自身の生活に生じたことのあいだに結ばれる等価性の痕跡となる。現実を再認識しながら、この社会は、新しい、幻影のような現実を、社会が解釈するのと同じものの複製として構成し始める。それは、まさに私が儀礼と呼ぶもの、廃れた慣習、祝祭、競技などである。反復を用いる思考はトーテミズム的世界観の前提であり、そこにおいて、人間と環境、共同体と個人が融合する。この融合により、自らを自然とみなす社会は、その日常性の中で、まさにこの自然の生を反復する。すなわち、我々の言葉で言うならば、太陽の輝き、植物の誕生、闇の訪れなどを再現するのである。

（本書七七頁）